

朗読文

最近はどうな商品でも丈夫になって、少くらしい乱暴に扱っても壊れなくなった。仮に、テープレコーダーを落としてひびが入っても、機械としての機能はなんともない。建築物も車もあらゆるものが丈夫になった。丈夫なことはいいことだ。すべてものは丈夫でなければならぬ。弱いということは欠陥である——こういう通念が私たちにはある。ところが、そのような丈夫なものの中に混じって、誰からもその弱さを悪いと意識もされずに使われている唯一のものがある——それは障子である。

障子は破ろうと思えばすぐ破れる。ちよつとものが触ったり、子供が指を突いただけで破れてしまう。こんな弱い商品はない。しかし誰もが、障子が欠陥商品だから、もつと強度を上げるとは主張してはいない。この障子というものは、ものあり方の非常によい面を示している。ものがメーカーの努力によってよくなった。丈夫になって、ちよつとやそつとでは壊れない。このことが使う側に乱暴に扱っても平気という粗暴な気持を養つてしまった。ものによって人間が育てられるということの逆現象である。丈夫なもの、壊れないうものを使って、知らぬ間に壊れていったのは人間自身のほうだ。だが障子は、弱いがゆえにこそ、取り扱う者に丁寧な扱いを要求する。それによって、扱う者が育つ。昔ながらに、障子のあけ方一つにしても作法があるのは、そういう意味を持っているのである。

それだけではない。障子は、直すことを考えるという立場から見るとき、実に素晴らしいものだ。今日の進んだ技術の道具、例えばマイクロコンピュータでも自動車でも、直すときは、その故障した部分を修理するのではない。悪い部分を含めたユニット全体を取り替えてしまう。部分修理の面倒、手間を節約したほうがより合理的だという姿勢である。仮に集積回路が二十個ついたプリント基盤があつて、そのうち一個が壊れていたとすると、そつくり取り替えてしまうから、壊れていない残りの十九個も廃棄してしまう。こういう修理方法が最近では極めて多くなつてきた。これは障子の修理の仕方と正反対である。

障子では、一ヶ所破れたといつても全部取り替えるようなことはしない。そればかりか、破れた柵の十五センチ角ぐらいの紙全体を切り取つてそこに新しい紙を貼るといふようなことさえ、初めはしない。まずは、破れた所を元に戻し、破れ目に、色紙を紅葉もみぢの葉に型どつて貼るといふようなことをする。すると、その障子は修理する以前よりも美しくなる。大抵のものは壊れる前を一〇〇とすれば壊れて三〇、直して八〇がいいところだが、障子は破れる前が一〇〇で、直せば一三〇にもなる。壊れて修理したほうがより美しくなる。パリから有名なデザイナーが来て、日本の建築をあちこち見て歩いたとき、破れた障子に紅葉や桜が貼つてあるのに、いたく感じ入つて、そればかりカメラに収めて帰つたという。

今日、機械はどんどん進歩して、壊れたからといって素人が手を出すことはできない。専門家にしか直せないものほど、進歩的で価値あるものと思いがちだ。もちろんその考えもあながち間違ひではない。だが、素人にすぐ直せるようなものを軽く見るようになること間違ひなくある。

ものを直すということは人間にとって非常に大事なことであり、道具というものに本当の愛情を感じる源でもある。修理は機械と人間が一体となることなのだ。